三重大学教育学部研究紀要　第 67 巻　教育科学　（2016）　359 － 365 頁

高校生の社会的スキルに対する自己認知ならびに習得したいスキルと教師の習得させたいスキルとの関連

栗谷　美樹*・中西　良文**

A study on high school students' cognition of social skills and relationship between the skills which high school student want to acquire and the skills which teachers want the students to acquire

Miki KURITANI and Yoshifumi NAKANISHI

要　旨

本研究では、高校生に対してどのような社会的スキルの向上を目標に授業を行うと効果的であるのかを検討するために、同一の高等学校における生徒（1 年生 240 名）ならびに教職員（37 名）を対象に質問紙調査を行った。生徒には自尊感情測定尺度（東京都，2010）と社会的スキル尺度（中台ら，2003）及び習得したいと思う社会的スキルについて、教師には生徒に習得させたい社会的スキルについて調査を行った。その結果、教師が考えている以上に生徒が自分の思いを上手に相手に伝えるスキルを習得したいと考えていることや、教師の重視するスキルについて生徒が自分の学習不足に気づいていない可能性も考えられた。このような生徒と教師の意識のずれ方のパターンにより授業の構成が変わってくると考えられるため、生徒の社会的スキルの状態把握を丁寧に行う必要性が考えられた。

キーワード：高校生、社会的スキル、自己認知、習得、教師

1．問題と目的

1－1　中途退学者の現状と課題

文部科学省の平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、高等学校における中途退学者数は、55,657 人であり、依然 5 万人を超えている（文部科学省，2014）。三重県の状況をみると県立高等学校では、中途退学者数は 560 人で前年度より 5 人増加となっている（三重県教育委員会，2014）。中途退学の事由では「学校生活・学業不適応」が 52.5％と最も多く報告され、「進路変更」の 17.2％を大きく上回っており、学校不適応による中途退学の多さは看過できない大きな教育課題であるといえる。

1－2　中途退学と学校適応との関連

学校適応については、関心の高まりから多くの研究が蓄積されている。これらの多くは、学校への適応感や不適応感を人間関係や学業などの要因が集まったものとして測定しており、人間関係や学業が適応感に強い影響を与えていることを明らかにしている（小泉，1995；内藤・浅川・高瀬・古川・小泉，2005；大久保，2005）。これらの研究の知見から、学校不適応による中途退学者を減少させるには人間関係や学業への支援が必要であると考えられる。人間関係については、埼玉県教育委員会「高等学校中途退学者追跡調査報告書」(2011)において、学校を辞めた理由に人間関係と答えた値は 15.0％で、文部科学省の調査で報告されている 6.1％の 2.5 倍であったことから、学校側の見立て以上に人間関係がうまく構築できない生徒が多いことが窺えると報告している。このように生徒の人間関係のつまずきは、学校関係者の認識より多く、長期間にわたり課題となり得る深刻な問題であることが考えられる。そのため、学校不適応による中途退学者を減少させ、

＊ 三重県立相可高等学校
＊＊ 三重大学教育学部

中途退学後の問題に繋げないようにするためにも人間関係への支援が重要であると考えられる。

1－3　人間関係と社会性の関連

人間関係について高等学校学習指導要領解説「特別活動編」（2009）では、特別活動改訂の趣旨の中で「自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりすることから、それらにかかわる力を実践を通して高めるための体験活動や生活を改善する話合い活動、言葉でまとめたり、発表し合ったりする活動を重視する」（p 2）と示されている。このことは、自分に自信が持てず、人間関係に不安を持つなどの自尊感情の低下と社会性の育成の不十分さが、好ましい人間関係を築きにくくしている要因であると示唆しており、教育活動の実践に良好な人間関係を築く内容を取り入れ、自尊感情の向上や社会性の育成を行うことが重要であると考えられる。

1－4　良好な人間関係を育成する教育プログラム

自尊感情や社会性のいずれも、人との関わりの中で育まれ身に付けていくものであると考えられる。しかし、現代の子どもたちの社会性の乏しさや弱さについては、学習指導要領解説（2009）でも「近年、少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化などが進む中で、家庭や地域社会において社会性を身に付ける機会が減少している。また、情報化の進展により間接体験や疑似体験が膨らむ一方、望ましい人間関係を築く力などの社会性が身に付けにくくなっている」（p 11）と指摘している。人との関わりの中での学習を考えると、生徒が集団活動など体験的な人との関わりを日常的に経験できる場面は学校であり、学校生活の大半を占める授業であると考えられる。そのため、授業を通じて生徒に対して社会性や対人関係能力を育むための取り組みを行う必要性が考えられる。そして、学校において心理学の知見に基づき開発・予防的な教育プログラムが検討・実施されている状況があり、実証的研究も多く行われるようになってきている。これらのいずれも対人関係スキル（ソーシャルスキル・コミュニケーションスキル）の向上を主目的としており、それにより自尊感情の向上や学校不適応の予防につながっている（青木，2011；西澤，2013：佐藤，2012）。

1－5　高等学校における対人スキル教育プログラム

対人関係スキルの向上を目的とした実証的研究は、高等学校でもいくつか行われている（小林・稲垣・丹保・土合・山岡・多賀・菅原・川上・池上・島，2003；渡辺・原田，2007）。しかし、あまり多く実施されていないのが現状である。それは、生徒の実態が学校の特性により異なることが考えられることや、高校では予防を目的とした取り組みに対する効果を期待する割合が低いこと（荒木・中澤，2008）、心理教育を実施してこなかった理由について「必要を感じなかった」「他の専門家に任せる」と考えている教員が多い（安達，2014）ことから、教師側からの実践の要望が少なかったためではないかと考えられる。しかし、高校生における人間関係は、近い将来社会へ出て行くために必要な社会的態度を学ぶためのものだけでなく、学校生活を適応的に過ごすための大切な要因である。そのため、良好な人間関係を築くために社会的スキルの育成に取り組むことは重要なことであると考えられる。

1－6　本研究の目的

本研究では、高等学校での対人関係スキルの向上を目的としたソーシャルスキル・トレーニング（以下SST）などの心理教育の普及を試みるために、どのような社会的スキルの向上を目標に授業を行うと良好な人間関係を築くために効果的であるのかを検討する。SST の先行研究では、児童生徒の実態を把握する質問紙や観察により実施者がターゲットスキルを検討し決定していることが多い。しかし、高校生を対象とする研究では学びたいスキルについての調査を行うなど、発達に即した配慮がされている（渡辺・原田，2007）。本研究ではこれらのことを踏まえて、生徒の自尊感情の状況と社会的スキルの自己認知を質問紙により調査し、生徒の社会的スキルの状況を把握するだけでなく、生徒の習得したい社会的スキルについての調査も行うことにした。渡辺・原田（2007）では社会的スキルに対する自己認知と習得したいスキルの調査は違う調査法で行われていたが、本研究では社会的スキルの自己認知と習得したいスキルの調査には同じ質問項目を使用し、生徒の自己認知と習得したいスキルの関連を考察することとした。これは、高校生にとって社会的スキルが、習得できているなら学ぶ必要はないと判断するものであるのか、それとも習得できているがまだ学びたいと考えるものであるのかを知る手掛かりとなる。また、質問項目は教師が生徒に習得させたい社会的スキルの調査にも使用し、生徒が習得したいスキルと教師が習得させたいスキルについての関連も考察することとした。これは、教師と生徒の意識の違いが大きい場合、教師が習得させたいと授業を行っても、生徒の必要性が低くあまり関心を引き出せないことが考えられ効果が上がらないと考えるためである。

2. 方　法

2－1　生徒を対象とした質問紙調査

ア　調査対象者

高等学校の中途退学の予防的支援には1年生が望ましいと考え、県立A高等学校の1年生240名（男子99名、女子141名）を対象として調査を行った。そのうち、欠席及び同意の得られなかった3名を除いた237名を分析の対象とした。

イ　調査時期

2015年6月、ホームルームの時間を活用し担任教師による一斉配布、一斉回収方式で実施した。

ウ　調査内容

①　生徒の自尊感情と社会的スキルに対する自己認知について

先行研究を踏まえ以下の尺度を用いて35項目の調査を実施した。教示文として「次の項目は、あなたにどの程度あてはまりますか。「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」のうち、もっとも自分の気持ちに近い数字に○を付けてください。」と示し4件法で回答を求めた。

①－1　自尊感情測定尺度（東京都版）

東京都教職員研修センターと慶応義塾大学が共同で作成したもので、「自己評価・自己受容」、「関係の中での自己」、「自己主張・自己決定」3下位尺度22項目で構成されている（東京都，2010）。この尺度は、学校現場で求められる自尊感情を測ることを目的として考えられ、学校適応の予測という点で有用であることが示唆され、学校現場で求められる自尊感情を測定する尺度として適切であるとされている。

①－2　社会的スキル尺度

小林・相川（1999）が提唱している「基本ソーシャルスキル」と宮前・繪内・阪根・藤本（2001）を参考に、中台・金山・斎藤・新見（2003）が作成したスキル13項目を用い、これらのスキルについて身に付いていると思うかについて回答を求めるように修正した。なお、小林・相川（1999）が提唱している「基本ソーシャルスキル」は、子どもたちにとって基本的かつ重要なもの、教室を中心に集団指導で教えられるもの、1単位時間から取り上げることが出来るものという基準で選択されたものである。

②　習得したい社会的スキルについて

「下記の項目について、勉強することにより身に付けることができるとしたら、どの項目を身に付けたいですか。身に付けたいものすべてに○をつけてください。」という教示文に続き、中台ら（2003）が用いた13項目を列記した。

2－2　教師への質問紙調査

ア　調査対象者

県立A高等学校に勤務する教職員（非常勤講師は除く）37名を対象とした。

イ　調査時期

2015年7月、職員会議で調査の趣旨を説明した後、各教職員の担当箱へ調査用紙を配布し、職員室に設置した回収箱にて回収を行った。回収率は61.7%であった。

ウ　調査内容

①　生徒に習得させたい社会的スキルについて

「下記の項目について、日頃指導している生徒に身に付けさせたいと思う項目はどれですか。身に付けさせたいものすべてに○を付けてください。」という教示文に続き、中台ら（2003）が整理したスキル13項目を列記した。

3．結　果

3－1　尺度構成と尺度の信頼性

ア　自尊感情測定尺度

先行研究に従い下位尺度得点を算出し、各下位尺度の内的整合性を確認するため、Cronbachのα係数を算出した。「自己評価・自己受容」はα＝.87、「関係の中での自己」はα＝.76、「自己主張・自己決定」はα＝.83であり、それぞれ高い内的整合性が確認された。下位尺度の平均値、標準偏差をTable 1に示す。

イ　社会的スキル尺度

先行研究では下位尺度を設けていないため本研究でも同様に点数化を行った。内的整合性を確認するため、Cronbachのα係数を算出したところα＝.89であり高い内的整合性が確認された。尺度の平均値、標準偏差をTable 1に示す。

3－2　生徒の社会的スキルに対する自己認知

生徒の社会的スキルに対する自己認知を明らかにするため各項目の平均値と標準偏差を算出した（Table 1）。その結果、生徒が平均値3以上と回答し、概ね習得していると考えている社会的スキルは7項目あり、それらの多くは関係開始や関係維持させるスキルであった。また、生徒の回答平均値が2以下で生徒が習得できていないと感じている社会的スキルは、問題解決の方法や質問を自分で考え行動するスキルや感情をコントロールするスキルであった。

Table 1　各尺度の平均値と標準偏差（N=237）

	平均値	標準偏差
自尊感情		
自己評価・自己受容	2.66	.63
関係の中での自己	3.31	.46
自己主張・自己決定	3.11	.56
社会的スキル	3.06	.49
上手にあいさつする	3.52	.62
上手に自己紹介する	2.81	.81
上手に人の話を聴く	3.01	.76
上手に質問する	2.62	.83
遊びなどの仲間に入れてもらう	3.41	.69
遊びなどの仲間に誘う	3.42	.79
褒める・励ます・慰めるなど、暖かいことばをかける	3.47	.64
相手の気持ちを考えて接する	3.25	.66
自分のしてほしいことなどを上手にあるいはやさしく頼む	3.21	.71
自分にとって嫌なことやできないことを上手に断る	2.95	.78
自分の意見や考えをはっきりと伝える	2.91	.78
誤解や意見の食い違いなどのトラブルを上手に解決する	2.61	.86
イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする	2.69	.87

Table 2　自尊感情と社会的スキルの相関係数（N=237）

	自己評価・自己受容	関係の中での自己	自己主張・自己決定
関係の中での自己	.46**		
自己主張・自己決定	.62**	.55**	
社会的スキル	.55**	.64**	.65**

** p <.01

3－3　生徒の自尊感情と社会的スキルに対する自己認知の相関分析

自尊感情と社会的スキルの自己認知との関連を調べるため、自尊感情測定尺度の 3 下位尺度と社会的スキル尺度との間の相関係数を算出した（Table 2）。その結果、生徒の自尊感情と社会的スキルに対する自己認知の全てに正の相関がみられた。

3－4　教師が生徒に習得させたいスキルと生徒が習得したいと考えるスキルの関連

生徒に習得させたいスキルと生徒が習得したいと考えるスキルの関連を調べるため、社会的スキル項目それぞれについて選択された度数に対し、χ^2 検定を行った（Table 3）。その結果人数の偏りは有意であった（$\chi^2(12)=35.04$, p <.01）。これは、教師の習得させたいスキルと生徒が習得したいスキルに差があることを示している。そこで、どのスキルがこの有意性に貢献したのか検討するために、残差分析を行った。その結果「上手に自己紹介をする」、「上手に質問する」、「上手にあいさつをする」、「上手に人の話を聴く」、「相手の気持ちを考えて接する」のスキルに有意な差があることが示された。

Table 3　生徒の習得したい／生徒に習得させたい社会的スキルの度数表

	生徒（N=237）		教師（N=37）	
	人数	%	人数	%
上手にあいさつする	90	37.97	27	72.97
上手に自己紹介する	86	36.28	7	18.91
上手に人の話を聴く	98	41.35	32	86.48
上手に質問する	106	44.72	9	24.32
遊びなどの仲間に入れてもらう	58	24.47	6	16.21
遊びなどの仲間に誘う	51	21.51	6	16.21
褒める・励ます・慰めるなど、暖かいことばをかける	79	33.33	18	48.64
相手の気持ちを考えて接する	112	47.25	36	97.29
自分のしてほしいことなどを上手にあるいはやさしく頼む	57	24.05	12	32.43
自分にとって嫌なことやできないことを上手に断る	105	44.30	16	43.24
自分の意見や考えをはっきりと伝える	125	52.74	23	62.16
誤解や意見の食い違いなどのトラブルを上手に解決する	120	50.63	18	48.64
イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする	130	54.85	25	67.56

4．考　察

4－1　自尊感情と社会的スキルの関連

生徒に対する質問紙調査より、自尊感情の 3 下位尺度と社会的スキルに関する自己認知の間には、全て正の相関があり、社会的スキルを習得していると自己認知している人の多くは自尊感情が高いことが示された。このことは、金子ら（2006）が指摘するように、自尊感情とソーシャルスキルは人間関係を良好に保つために相乗効果をもたらすということから、社会的スキルの獲得が自尊感情を促進し、それを通して良好な人間関係が保てることが考えられる。また、曽山（2011）が自尊感情とソーシャルスキルはいずれも、適応感に対する高い影響力を持つことを明らかにしている。そのため、高校生に対する社会的スキルの学習は自尊感情を高めるうえで重要な介入であり、適応感を高めることにもつながると考えられる。これらのことにより、

高等学校の現場においても対人関係スキルの向上を目的としたSSTなどの心理教育を実施することは重要なことであると考えられる。

さらに、社会的スキルに関する自己評価と自尊感情の「自己主張・自己決定」との間に他の側面より相関が強く出ていることと照らし合わせると、「自己主張・自己決定」を踏まえた社会的スキルの学習は、生徒の苦手なスキルの改善だけでなく、自尊感情を高めるうえで重要な介入になると考えられる。

4－2　生徒の社会的スキルに対する自己認知と生徒が習得したいと考えるスキルとの関連

生徒の社会的スキルに対する自己認知については、4件法で回答を求めたため、平均値3以上ということは概ね習得していると回答している生徒が多いことを示している。本研究の結果で、生徒が平均値3以上と回答している社会的スキルは7項目であった。その7項目は、遊びへの誘い、仲間に入れてもらう声かけや自分のして欲しいことを頼むことなどであり、これは、今までの生活経験の中で行っている回数も多く、また、自分の思いが相手に伝わる成功体験も多く経験できていると考えられるため、自分なりに習得していると自信が持てる項目であったと思われる。一方、生徒の回答平均値が2以下で生徒が習得できていないと感じている社会的スキルは、感情をコントロールするスキルや自分の意見を伝えるスキル、問題解決するスキルであることから、生徒は感情のコントロールや自己主張することを苦手と感じていることが窺える。

生徒が習得したいと考えるスキルの度数表（Table 3）から、すべてのスキルに対して習得したいニーズがあることが窺える。その中には、生徒の社会的スキルに対する自己認知で概ね習得していると回答している7項目も含まれており、そのうち3項目は4割以上の生徒が学習により習得したいと回答している。これは、習得していると自己認知しているスキルに対しても、学習により習得したいニーズがあることを示し、自分のスキルの習得に自信が持てない状況や、習得していてもさらに学びたいスキルであることを表していると考えられる。すなわち、高校生にとって社会的スキルの学習は、習得しているから学ぶ必要はないと判断するものではなく、習得していても学びたいと考えるものであると考えられる。このことは、高校生という時期が、自分が今まで身に付けてきたソーシャルスキルを見直し、自分の意思で行動をコントロールできる存在として、ソーシャルスキルの学習および再編成がなされる時期である（堀毛，1990）という指摘ともつながり、高校生の発達の特徴であるといえる。このようにソーシャルスキルを見直し再編成する時期であるからこそ、正しい知識を学び活用したいという気持ちが高くなり、習得していても学びたいと考える生徒が多かったのではないかと考えられる。

4－3　教師が生徒に習得させたいと思うスキルと生徒が習得したいと考えるスキルの関連

教師が、生徒に習得させたいと思う社会的スキルと生徒が習得したいと考える社会的スキルの関連を調べた結果、その選択の偏りに有意差のあることが示され、社会的スキルの習得に関して教師と生徒の意識に差があることが明らかとなった。教師が生徒に習得させたいと考えている以上に生徒が習得したいと考えている社会的スキルは「上手に自己紹介をする」、「上手に質問する」であった。これは生徒が、自分のことや自分の思いを上手に相手に伝えることに対して、教師が考えている以上にスキルが習得できていないと感じていることが考えられる。

また、教師が生徒に習得させたいと考えているほど生徒が習得したいと考えていないスキルは「上手にあいさつをする」、「上手に人の話を聴く」、「相手の気持ちを考えて接する」であった。この「上手に人の話を聴く」ということは、話し手が何を伝えたいのかを考えながら聴く必要があり、話し手の思いに寄り添うことが大切になってくると考えられる。このことから教師は、相手の思いを分かって働きかけることなど相手に対する思いやりを身に付けることを重視していることが考えられる。しかし、生徒はこれらのスキルについて、どれも身に付いていると自己認知している。そのため教師の考えるほど習得したいと回答する生徒が少なかったと考えられるが、どのスキルも35%以上の生徒が習得したいと回答しているため、習得したいというニーズが低いわけではないと考えられる。このような差が生じるのは、教師が生徒に習得させたいと思う社会的スキルが、生徒の社会的スキルに対する他者評価であるとも考えられるため、教師の重視するスキルについて、生徒が自分の習得不足に気づいていない可能性も考えられる。

このような教師－生徒間のスキルの習得に関する意識の差があるため、教師が生徒の習得したいスキルを選択して授業を行うことができない可能性が考えられる。また、教師が習得させたいと授業を行っても、生徒の必要性が低くあまり関心を引き出せないことも考えられ、効果が上がらない可能性も考えられる。このことから、高校生に対してSSTなどの心理教育を実施する場合は、社会的スキルの習得に関して教師と生徒の意識に差があることを考慮し、生徒の状況を丁寧にアセスメントすることが大切であると考えられる。

4－4 総合考察

本研究は、高等学校での対人関係スキルの向上を目的としたSSTなどの心理教育の普及を試みるために、どのような社会的スキルの向上を目標に授業を行うと良好な人間関係を築くために効果的であるのかを検討するものであった。

高等学校の現場においても対人関係スキルの向上を目的としたSSTなどの心理教育を実施することは重要であるが、本研究の結果から、高校生に対してSSTなどの心理教育を実施する場合は、生徒の状況を丁寧にアセスメントすることが大切であると考えられる。このことについては、渡辺・原田（2007）もソーシャルスキルのアセスメントを行う際には、他者評定、行動観察、ソシオメトリックテストなどを組み合わせる必要があると丁寧なアセスメントの必要性を述べている。本研究では、教師の習得させたい社会的スキルと生徒の習得したい社会的スキルの調査を行い、差が見られる結果となった。このことは、双方に調査を行うことで明らかとなることであり、より生徒の状況が明らかになったと考えられる。また、本研究では同じ調査項目で生徒の社会的スキルに対する自己評価も行っており、生徒の社会的スキルに対する状況をより詳しく把握することができたと考えられる。社会的スキルに対する生徒の自己評価、生徒の習得したいスキル（生徒のニーズ）、教師の習得させたいスキル（教師のニーズ）を対応させて考察する研究は見当たらないため、本研究の結果は、学校現場に社会的スキル教育を導入する際に参考となる資料であると考えられる。

以上のことから、実際に授業を行う場合には、丁寧なアセスメントにより得られた、社会的スキルの習得に関して生じる、教師と生徒の意識の差や生徒の社会的スキルに対する自己認知と習得のニーズから考えられる生徒の発達の特徴に留意して、それらのパターンにより対応を考える必要性があると考えられる。例えば、教師が生徒に習得させたいと考えているほど生徒が習得したいと考えていないスキルについて学習を行なう場合は、生徒の動機づけの低下として現れる可能性もある。したがって、こうしたスキルを学ばせる場合には、生徒にそのスキルの大切さを理解させる取り組みが必要になると考えられる。

5．今後の課題

本研究は、同一校の教員と生徒に調査を行っており、生徒に関しては1年生のみを対象に調査を行っている。高等学校は、学習する内容により様々な学科が設置されていることや進学率の差などにより様々な特性を持つため、本研究が必ずしも共通とは言えず、また学年による違いも予測される。また、本研究により社会的スキルの習得に関して教師と生徒の意識に差があることが明らかとなったが、その理由までは捉え切れていない。今後は面接調査などにより、より詳細に明らかにしていく必要がある。

さらに、本調査で得られたことに留意した指導案を作成し、実践した効果を検証するなど実地研究を積み重ねていく必要がある。

引用文献

安達知郎　2014　教員による心理教育実施に関する実態調査―青森県の学校教員を対象として―　弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, **11**, 28－36.

青木栄二　2011　対人関係の適応感を高める授業づくりーグループ・プロセスの振り返りを強化の授業に取り入れてー群馬県総合教育センター　平成23年度長期研修員研究報告書

荒木史代・中澤　潤　2008　予防的支援における教師の実践とスクールカウンセラーに対するニーズ　千葉大学教育学部研究紀要, **56**, 93－103.

堀毛一也・菊池章夫・二宮克美・斎藤耕二（編）1990　社会化の心理学ハンドブック：人間形成と社会と文化, 川島書店

金子恵一・服部洋兒・村松常司・藤田　定　2006　高校生のセルフエスティームと社会的スキルから見た攻撃的受動性に関する研究　学校保健, **48**, 307－324.

小林　真・稲垣応顕・丹保弘則・土合智子・山岡和夫・多賀香世子・菅原千香子・川上純子・池上道子・島三恵子　2003　高校生に対するソーシャルスキル・トレーニングの効果　富山大学教育実践総合センター紀要, **4**, 15－23.

小林正幸・相川　充（編）1999　ソーシャルスキル教育で子どもが変わる　小学校―楽しく身に付く学級生活の基礎・基本―　図書文化

小泉令三　1995　小学校から中学校における学校適応感の横断的検討　福岡教育大学紀要, **44**,　295－303.

三重県教育委員会　2014　平成25年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果の概要

宮前義和・繪内利啓・阪根健二・藤本光孝　2001　社会的スキル訓練に関する小, 中学校教員の調査　香川大学教育実践総合研究, **3**, 33－45.

文部科学省　2014　平成25年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査

文部科学省　2009　高等学校学習指導要領解説「特別活動編」

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三　1987　高校生用学校環境適応感尺度作成の試み　兵庫教育大学研究紀要, **7**, 135－146.

中台佐喜子・金山元春・斎藤由里・新見直子　2003　小・中学校教諭と中学生に対する社会的スキル教育のニーズ調査　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部, **52**, 267－271.

西澤秀樹　2013　中1ギャップ解消に向けた学校適応感の向上を図る研究－児童生徒への意識調査と中1ギャップ解消

プログラムの実践を通して－　青森県総合学校教育センター研究報告 2012
大久保智生　2005　青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－教育心理学研究，53，307－319.
埼玉県教育委員会　2011　「高等学校中途退学追跡調査報告書」，63－65.
佐藤貴志　2012　小学校高学年における自尊感情を高めるための指導に関する研究　青森県総合学校教育センター研究報告 2011
曽山和彦　2011　教職課程履修学生の自尊感情，ソーシャルスキルが適応感に及ぼす影響　名城大学教育年報，5，19－27.
東京都教職員研修センター　2010　自己評価シート　http://221.249.208.194/information/kenkyuhoukoku_kiyou/houkoku_22_data/jikohyouka 01.pdf（情報取得日 2015 年 5 月 11 日）
渡辺弥生・原田恵理子　2007　高校生における小集団でのソーシャルスキルトレーニングの効果－ソーシャルスキルおよび自尊心に及ぼす影響－　法政大学文学部紀要，55，59－72.